

RITO-MIKO

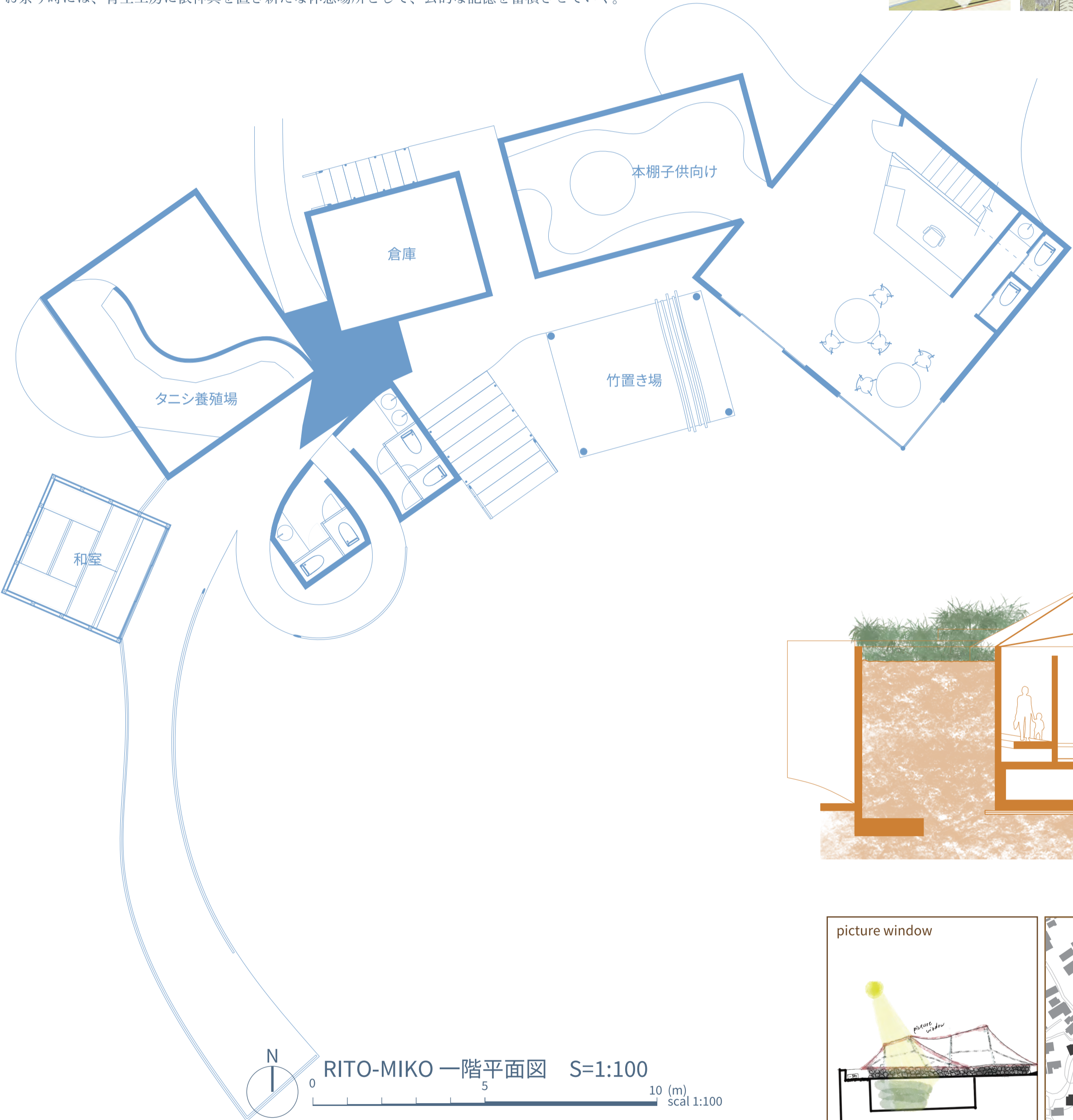
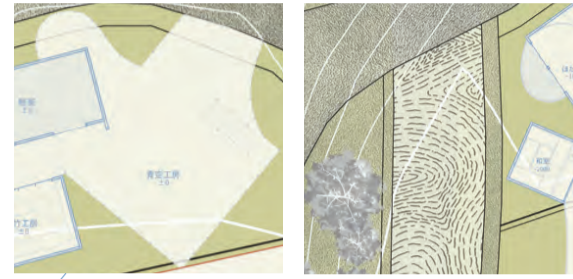
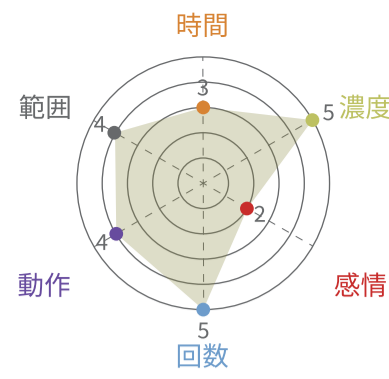
俵神輿

秋になると、俵神輿を担ぎいくつかのポイントで休憩をとりながらこの地域を周回するお祭り行事が始まる。大人の神輿と子供の神輿が列を作り、小さな子供も大人神輿のロープを握り置いていかれぬようと必死に練り歩く。その時々には郷愁の念を募らせ公的な記憶の積み重ねがなされてきた。だが、子供の会の終結とともに、子供神輿がなくなり、かつての大きな親子の姿は見るができなくなってしまったが、そんな中でも現存する地域のアイデンティティの一つ。

通常時とお祭り時

地域住民が自由に使える部屋がいくつもある住宅のような町民ホール。

通常時、子供向けの本棚が並ぶ空間で子供も親も梅の木や竹林、川の音など自然のなかで癒しの時を過ごす。川に面した和室では、趣味で詩吟を読んだり、お茶を立てたり好きなことを好きな時に楽しみにこれる。また、この施設を利用した人は、帰り際に竹工房に立ち寄り仮設建築のパーツである竹編の部分少しずつ編んでいく。協働者と会うことはなくても同じものを作ることで共同体としての意識や達成感からくる仲間意識が芽生える。お祭り時には、青空工房に俵神輿を置き新たな休憩場所として、公的な記憶を蓄積させていく。



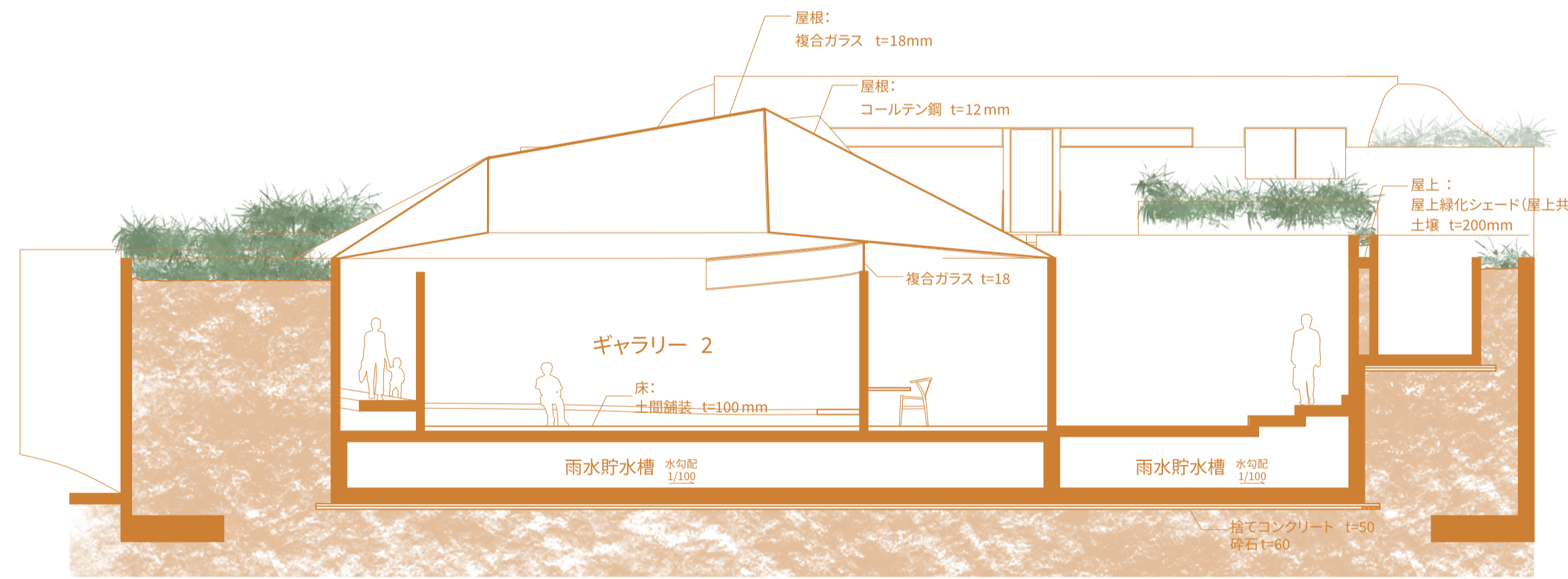
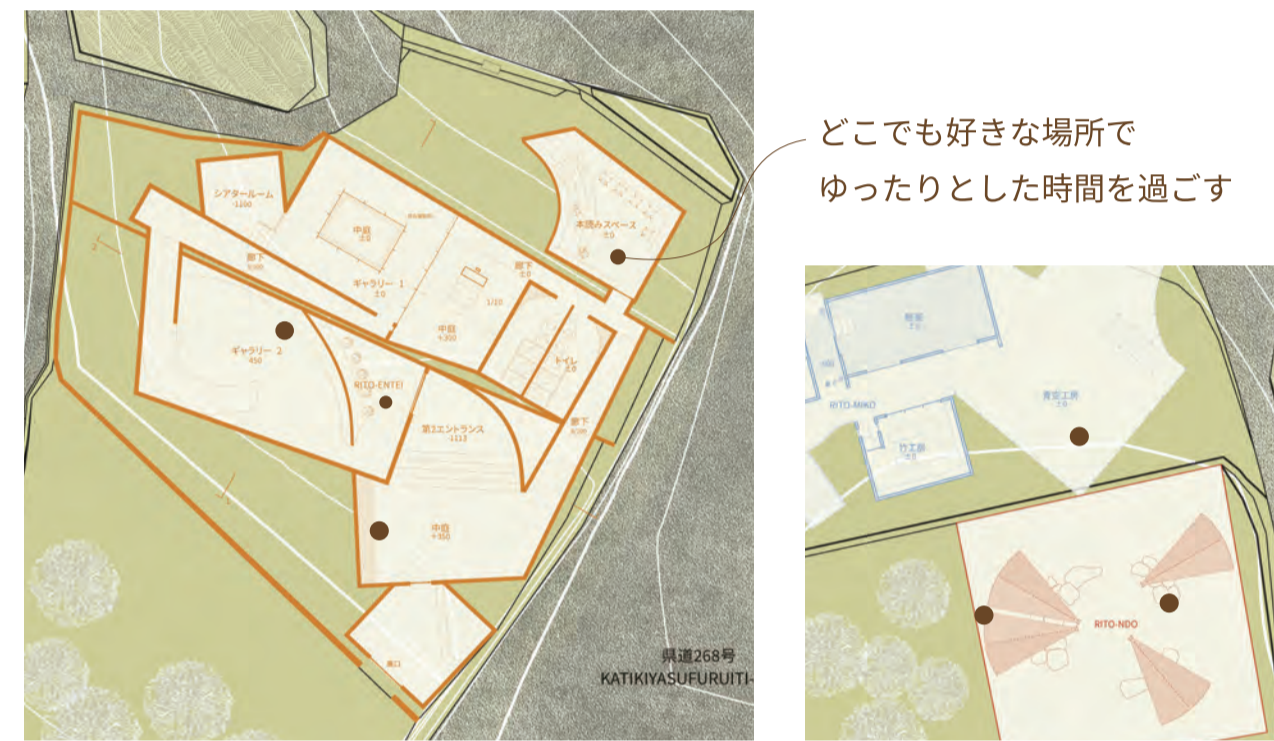
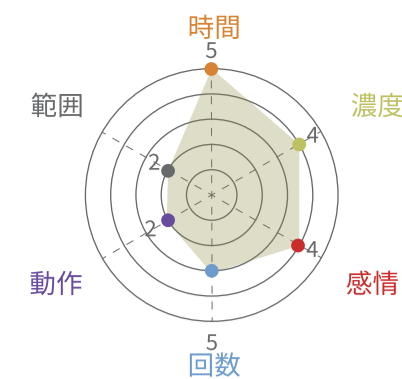
RITO-ENTEI

堰堤

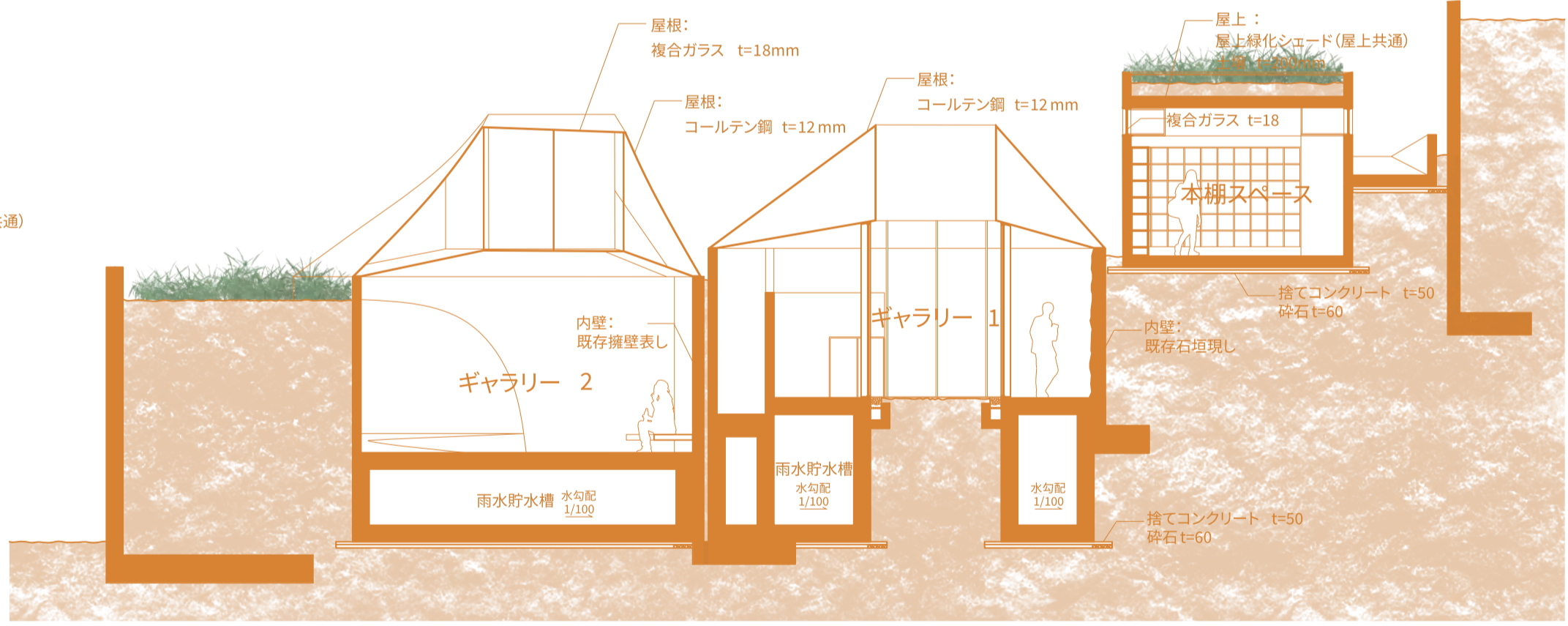
宅地化により 115m というちいさな郷愁空間は侵害され、土地に対する想いが投げやりになる今日この頃。宅地化という破壊者により愛に目覚めた私は、この地に蓄積してきた秋原の人々の想いをこの地に留める。

通常時と災害時

既存の擁壁や、コンクリートをそのまま使い RC 造で全体を構成する。通常時、大人向けの本棚が並ぶ空間で本を手に取り、この土地のどこでも自分が好きな場所で読書に耽けたり、ギャラリー 1 では地域の方の作品の展示をみたり、ギャラリー 2 ではただ静かに思いを馳せたり各々の自由な時を過ごすことができる。災害時、近隣の一時避難場所である老人ホームで気苦労したり、1 人になりたいと思った時に心のケアができる空間として解放し、住民の方はここを心の安心基地として思いを蓄積させる。



RITO-ENTEI AA' 断面図 S=1:100



RITO-ENTEI BB' 断面図 S=1:100



大きな建築が視界に入らない
時間を忘れて没入できる空間作り

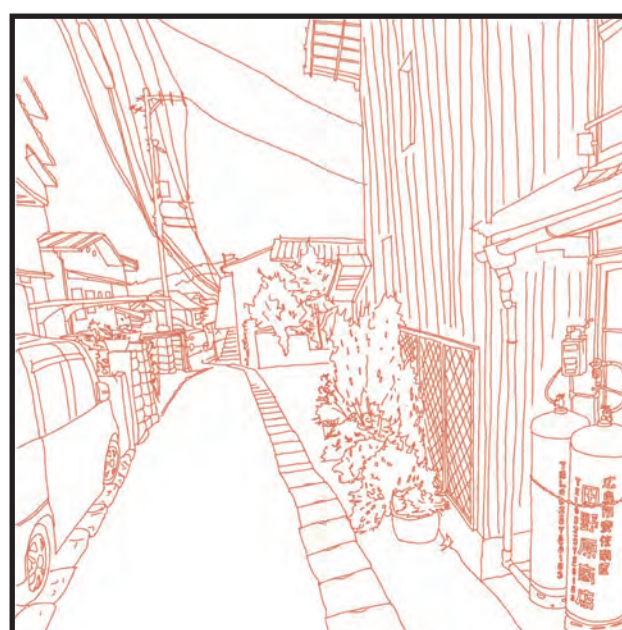
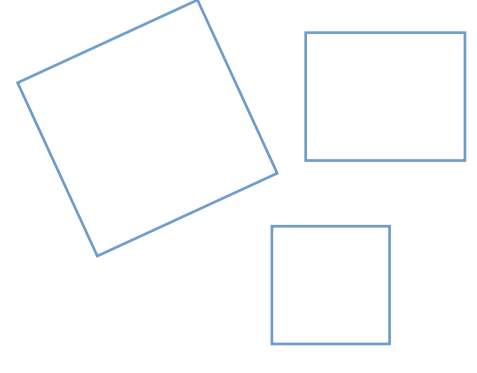
写し出す記憶

高低差が激しく地下に潜っていくような記憶

気づかないうちに地下に潜り込んでいくような空間



全面道路に接する RITO-MIKO は住宅地に馴染むスケール感で構成



写し出す記憶

道路に対する住み手のはみ出しのでっこみ引込みが空間を彩っていた記憶

